龍王太郎第七編

蘇芝粹

へ13
3699
7

へ13
3699

龍王太郎

第七編

上之巻

嘉永三年庚戌

春藤慶恵村

式亭小三馬作

香蝶楼豊國画

銀将以下の駒は皆翻て金となる。
飛車は龍王となる。角行は龍
馬となる。唯金将は極官なる易
ら ず見えたり。世草紙は従来象
戯の諸王なれども彼は詰
ず。想ふ人は好評と得く
年毎に嗣編数。桂馬の高上
まで七編まで成駒は歩に成
ともあらばれ香車の鎗に同じ。
指る趣向の駒組る本文口
繪の二枚落一紙員對馬の
世間並石田崩の堅ぶり眉飛車
取王を取られて王は弃ても
車に離る拙き将棋の癖
助言も聞ず勝ち差て書賈

のかぢに金銀を握せんと。
ふこえるの稿
を脱しぬ作の上の
悪口と酒の上の
悪口の不毋が生
得ぬ則深甲斐ぶ今云も
願ふこえ
貴顧と

嘉永三年
庚戌孟春
發兌

本町庵の
小三馬戯題

山賊の首長
安達太郎猛秀
人呼て天魔軍師と

兎の頭を画て
不意兎輩の魁首と爲り
元黨をく无頭の兎

天狗次郎
苦羅雞
本名松
六本木
枚之助
則房

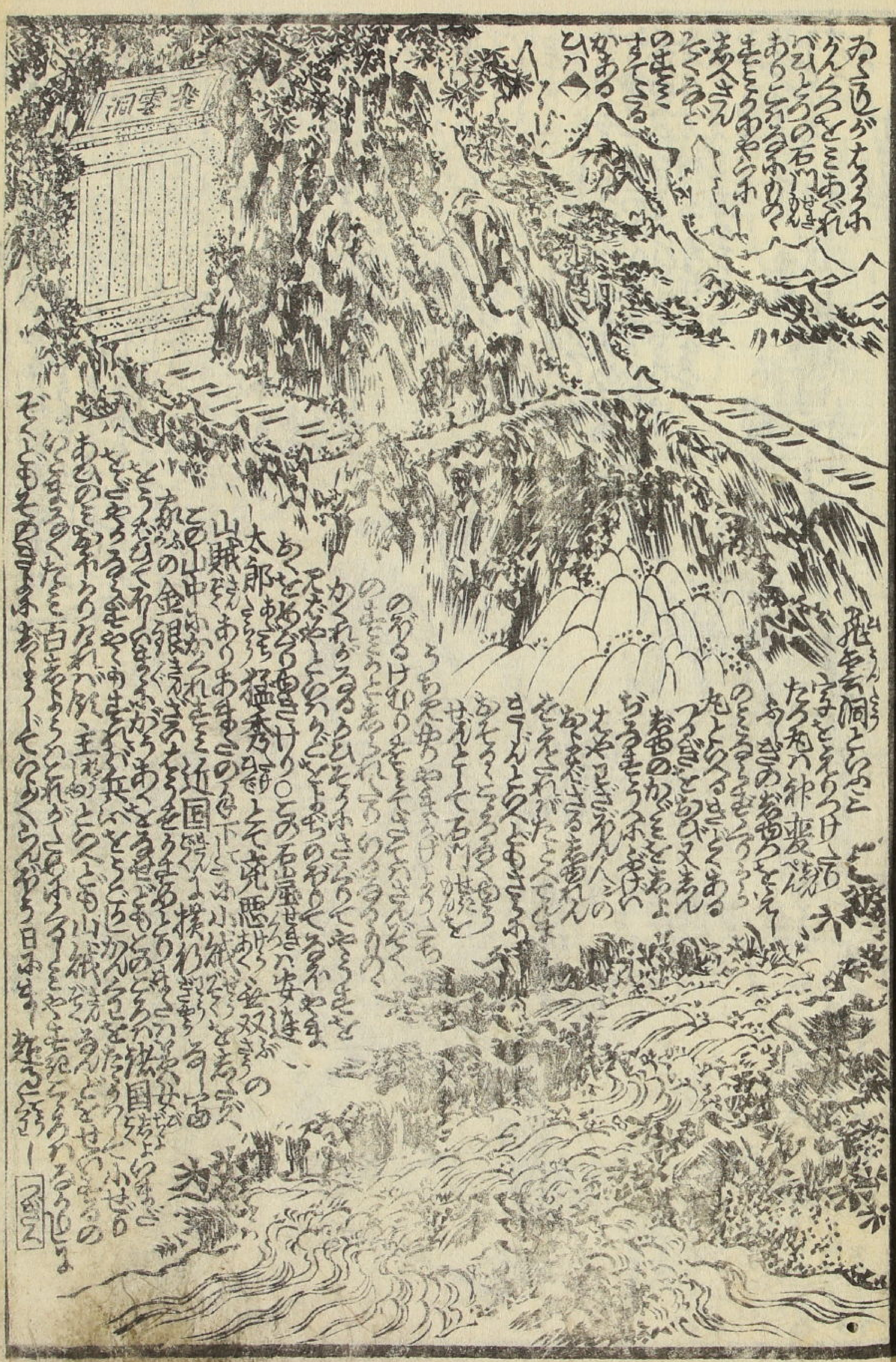
貢娘
早苗

掛名時
金搗
燭夜

詠四喜
久早逢甘雨
他郷遇故知
洞房花燭夜

信夫の里の郷士
倉積貢
須一子
助吉之の稲

○龍丸奥助不忘山の飛雲洞に至りて賊首の住家と知る


飛雲洞

飛雲洞

○式亭正舗製造所出張
小児金陽丸
大包十六粒入百文
小包八粒入五十文
神方聖利丸
一包代五十文
世界通じ業
とくどく

大極上品一枚代二百文
上品一枚代二百文

つづき
龍

一夜宿
一名鍋乳湯
代五十文

つゞき

嘉永三庚戌歳正月新刻目録

龍王太郎英雄譚 七編 八編 九編 一陽斎豊國画 式亭小三馬作

花白梅春風 小三馬作 國輝画

落語江戸嬉笑 三矢作 國輝画

御仏曽我春歳玉 折下亭稚員作

二人清二人忠信 裏表千千櫻 香蝶楼豊國画

右二種ハ故為柳亭種彦ガ正本製ヨリ引ヒ一編二編ノ大切ノ末実年正月ヨリ年々出板仕ル

書林錦絵御店 江戸通油町 藤岡屋慶次郎

小之馬作

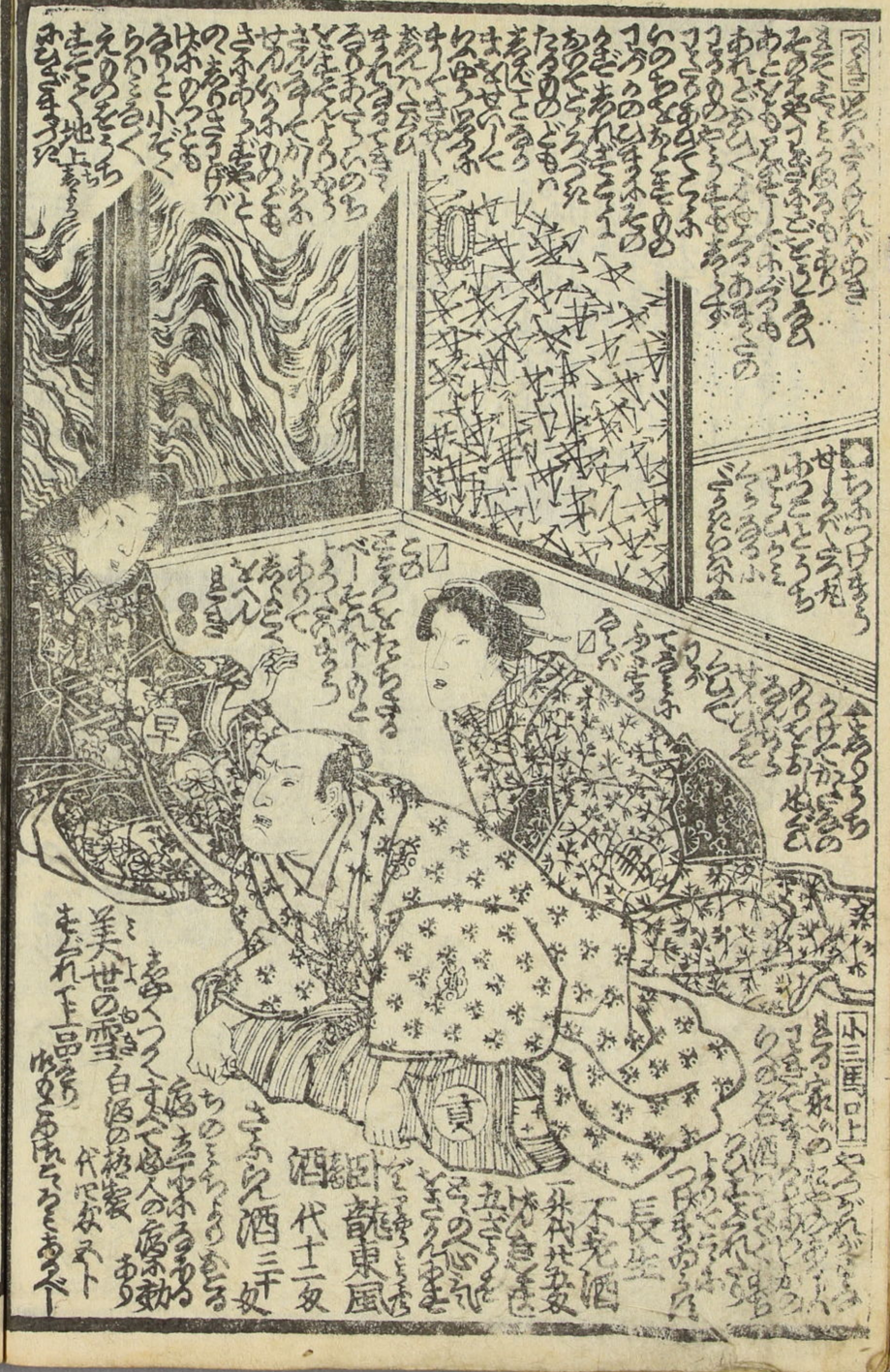
豊國画

下

嘉永三年庚戌孟陽穀市江戸通油街藤岡屋慶郎梓

龍王太郎七編

小三馬作
豊國画


長生不老酒
代十五文
龍東風紅酒
代十二文
さふえ酒三十文
代十五文

仙方遊素酒濃に極甘口。
代十五文
九花甘露酒
代十五文
水町二丁目北側中程
松屋廣瀬製

○式亭家製薬品目録

江戸の名

▲大包百五十文 ▲中包百文 ▲小包五十文 ▲紙袋五十文

仕出し

紙袋入御けんぶん式

正路ぢめ　うり　紙袋丁子

大包百文 小包五十文

大包二百文

五十文

大包百文 小包五十文

大包二百文

仕出し

代百文

代百五十文

代百文

代五十文

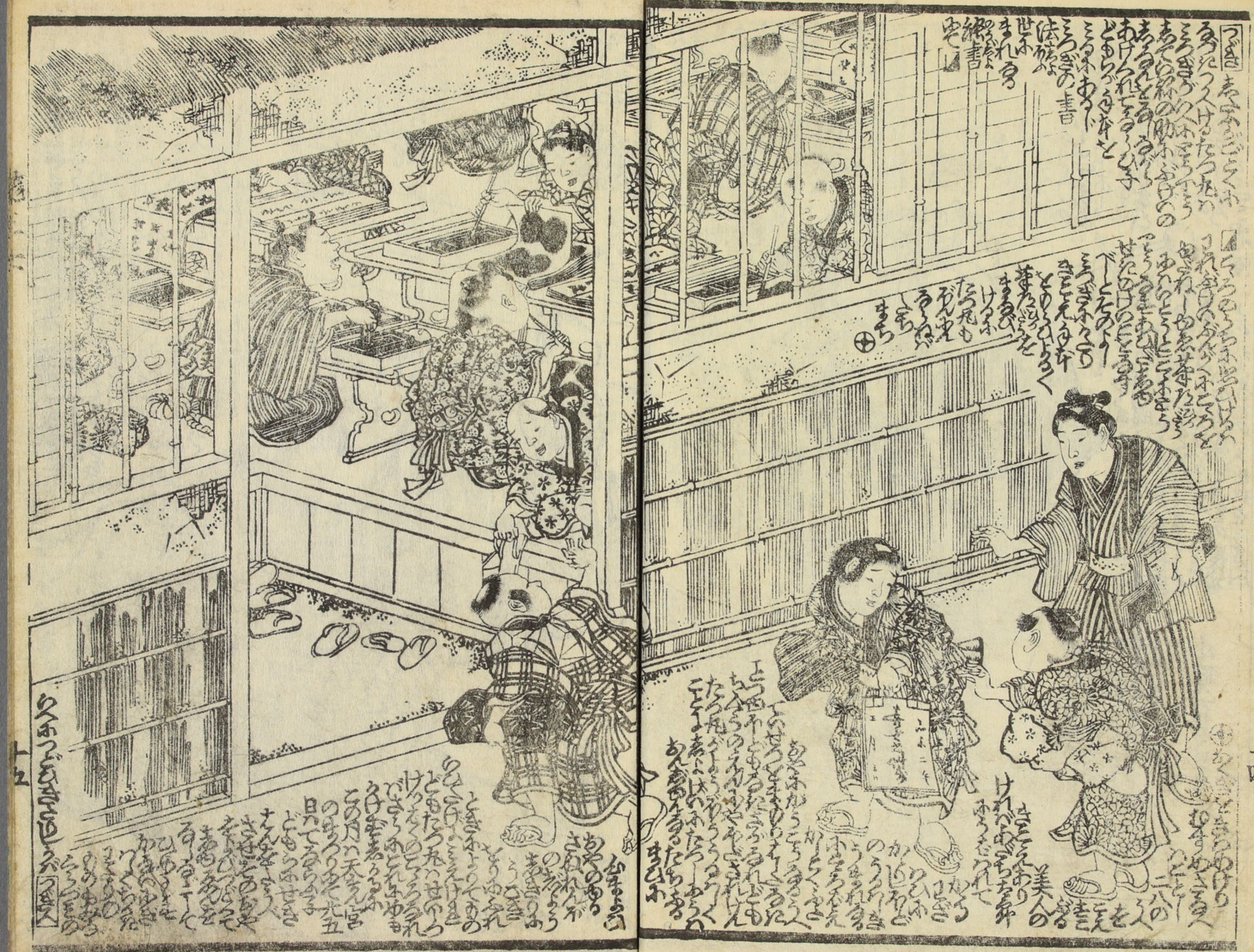
代百五十文

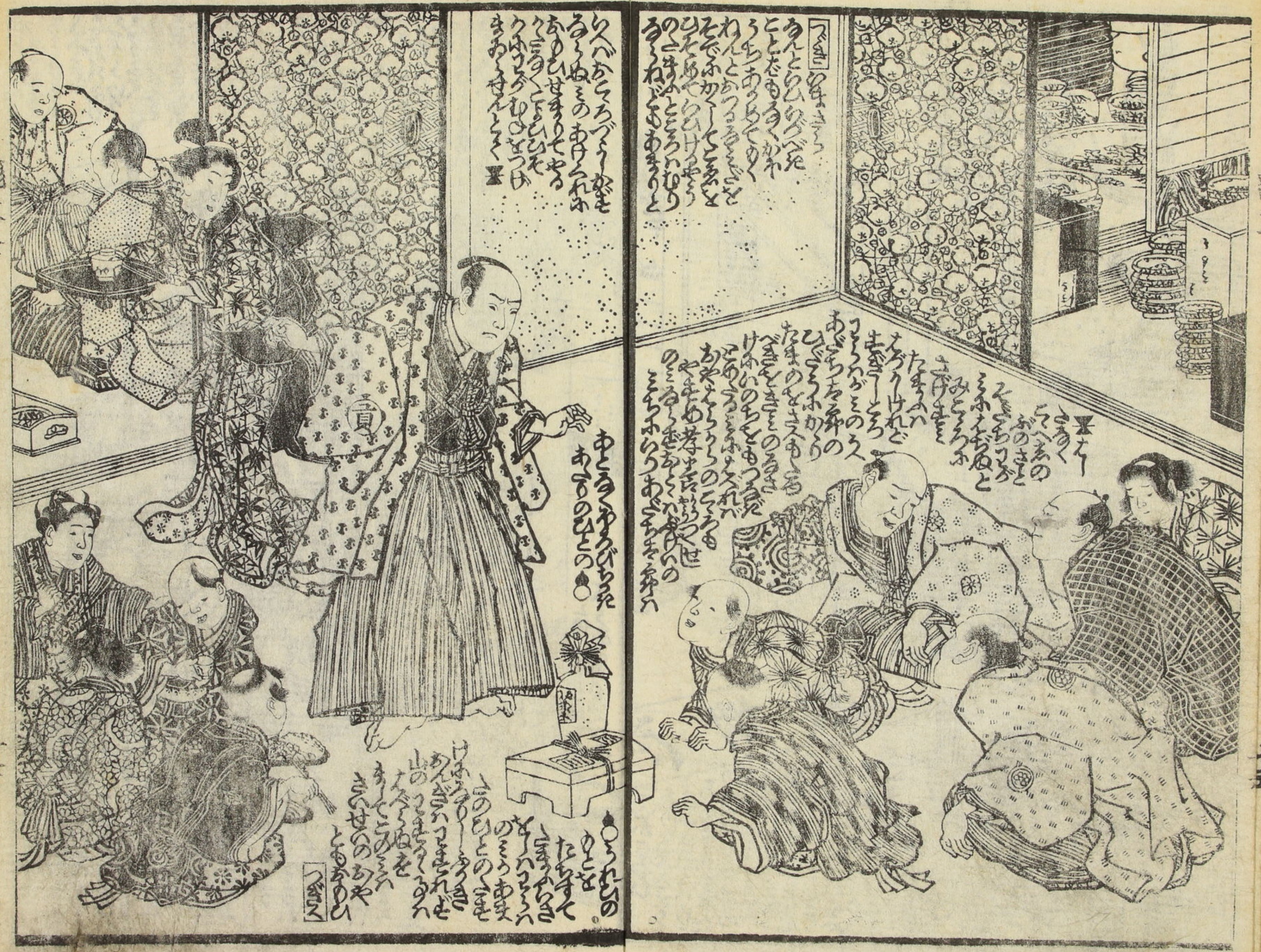
代五十文

代百五十文

代百五十文

代百





○作者家業
仙傳人参即効油
大貝代五十文
小貝代廿四文
婦きんぎょく人三養湯
大包代百文
小包代五十文
百三十二文
毎月十日目くすべ
◇十月ふ
月あり不仕合
月くのけいまつ

つゞき　むすぶのかゝのひきあらせちからとをうのえんのうとむすばれとりーむすのの

一夜ゐ
風引

一名調鼎湯

極製御匂袋
蘭奢待　金二百疋
花の宴　金二百疋
月の眺　金百五十疋
雪の友　金百疋
清涼　一包代二分
極製　天人香　一包代百十文

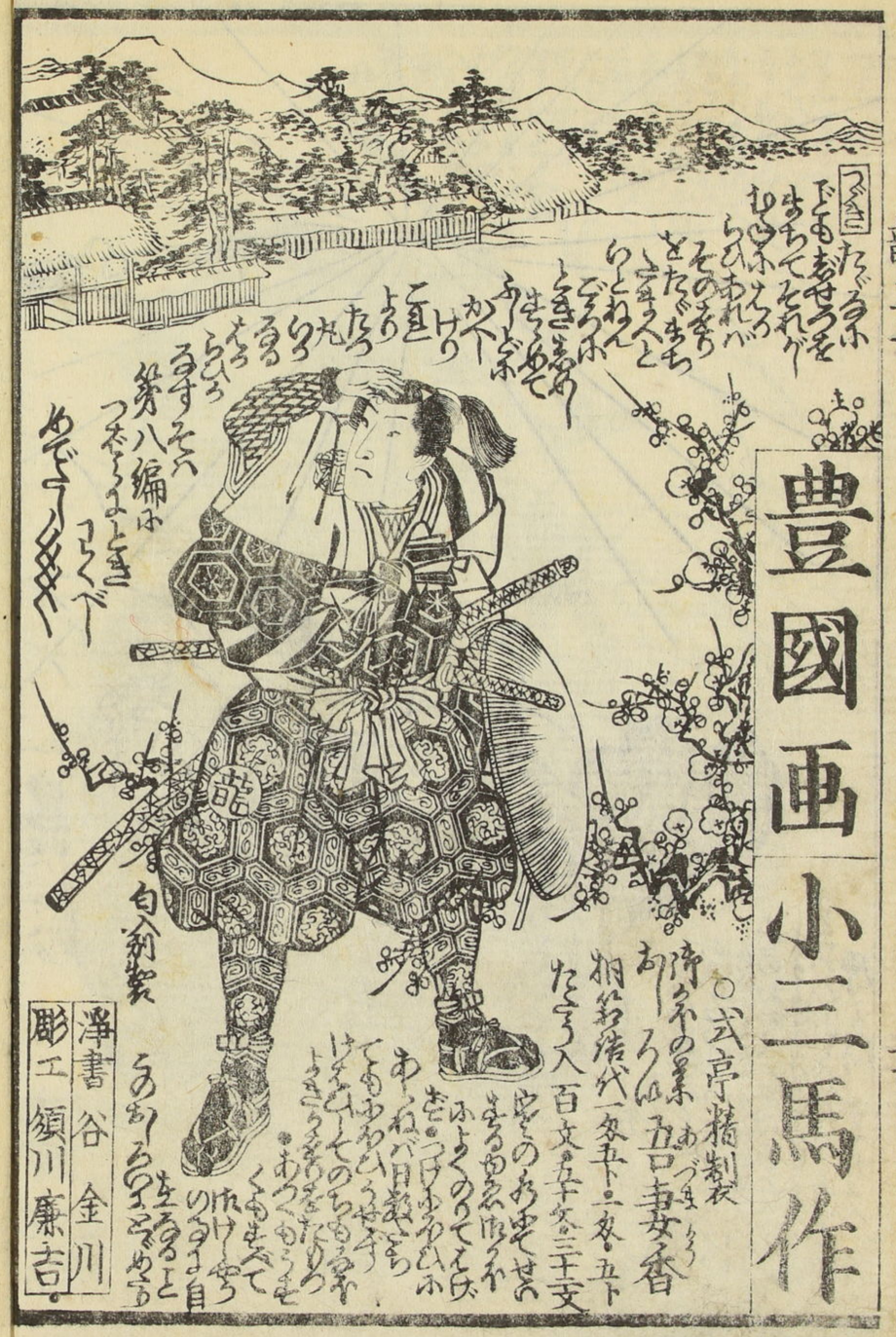
つゞき　さまくの薬とあるものをそれを用ひてはやくめぐらせばはのうれど不ぜんもなりうるものなり

●ざつとうけたまはるに血うすくうむ人にあるなんと血うすくあるものは

神ふれてよりうるうるあるものは

見ひらきうてゆくせざれいあるべしはるべしはるべしとあるべしはるべしとあるべしはるべしとあ

麦の面の詩解八編ホ出



嘉永三庚戌春新刻目録

七草四郎 若菜纂子 **さらぬひ譚** 初編 柳下亭種員作 四編迄 一陽齋豐國画

繪本川中軍鑑 初編 玉蘭齋擇 五編迄 五雲亭貞秀画

名取草双蝶々 前編 柳下亭種員作 後編 一陽齋豐國画

牡丹園女子莊子 初編 笠亭仙果作 二編 香蝶樓豐國画

書林錦繪卸店 通油町 藤岡屋慶次郎版